所管大臣の挨拶

（1面のつづき）

ボーダレス化に対応

平沼経済産業大臣

今後とも、経済の国際化、ボーダレス化の進展の中で、商品先物市場が我が国のみならず、広くはアジア諸国に商品先物機能を提供するなど、産業基盤としての役割を国内外において真に果たしていくことが求められています。経済産業省としても、我が国商品先物市場の健全な発展のため、主務省として求められる責務を全うしてまいりたいと考えております。

ヘッジの場として期待

武部農林水産大臣

現在の商品先物取引制度は昭和二十五年に新たに再出発したものであります。以後、政治、経済、社会情勢のめまぐるしい変遷の中、時々の要請に対応してきました。

現在、農林水産省では、食料の安定供給や農林水産業の経営の安定を目指し、足腰の強い農林水産業や食品産業の育成を図るなど、抜本的な構造改革を進めています。こうした中、商品先物市場は、農林漁業者や食品産業事業者にとってのリスクヘッジの場としても、従来にも増して、その役割が強く期待されており、農林水産省としても、商品先物市場の利便性・信頼性のさらなる向上を図り、国際的に高い評価が得られる市場づくりを推進してまいります。

大豆ミール上場

東穀取

あいさつする森實理事長

「隠れた大型商品」（森實孝郎東京穀物商品取引所理事長）、大豆ミールが十月十一日、東穀取に上場された。初日の出来高はご祝儀も伴って二万枚を突破。まずは順調なスタートを切った。だが、大豆ミールが先物取引本来の意義を発揮できるかはまだ、未知数。どう育てていくか、商品取引員の責務は大きい。

「出来高は当初、予想の四倍以上に達した」。上場当日の九月十一日の夜、東京倉庫で開かれた大豆ミール上場記念パーティーで森實理事長はこう切り出した。初日の出来高は二万千九百八十二枚。東京穀物商品取引所の予想、五千枚を大きく上回った。

もともと、上場初日はご祝儀商いが入るので、予想を上回る。だが、その後も、一日平均一万枚前後の売買があり、「思ったより出来ている」と東京穀物商品取引所でも満足気だ。

大豆ミールという、一見地味な商品が人気を集めたのには理由がある。上場時、ちょうど降って湧いたように狂牛病騒ぎが起こっていたことが大きい。肉骨粉の消費が減れば、その分、植物性飼料にとって替わる。その〝本命〟が大豆ミールというわけで、一気に大豆ミールの知名度が向上した。

といって、狂牛病騒ぎで大豆ミール相場が上がったわけではない。初日の終値は期先（七月限）で二万六千五百五十円。取引所側の付け値二万七千円を四百五十円下回った。その後も、総じて軟調な展開が続いている。これは牛肉の消費が減る―肉牛の飼育が減る―大豆ミール消費が減る、との連想が働いたためとみられる。

実際は日本の大豆ミール消費は二〇〇〇年で三百六十六万トン。世界の大豆ミールの消費量、一億千四百九十九万トンの約三％でしかない。それだけに、日本の狂牛病騒動が大豆ミール消費に即、響くことはないにしても、世界に広がれば影響は大。材料に敏感に反応して価格が動くことは先物取引にとって必要十分条件であり、その意味では早くも機能を発揮しているといえる。

その後、取組は徐々に厚みを増しており、商いの高水準と相まって、流動性を高めている。当業者がヘッジしやすい環境は整いつつあるといえる。ただ、まだ、当業者の参加はほとんどない。それをどう導いていくか、業界には大きな課題が残っている。

当日、乾杯の音頭を取った東穀取市場管理委員長多々良義成豊商事会長はこう述べている。「出来高が二万枚を超したことは大豆ミール市場の将来を確約している。これからは公正な価格を形成し、世界の畜産業界にヘッジの場を提供し、育つように努力しなければならない」。

「市場規模は千数百億円だが、それを使う業界の市場規模は三兆円。米国では大豆製油工場といわず大豆ミール工場といっている」（森實理事長）。それほど大豆ミールは商品として重みがある。

今後、大豆ミール市場の成長には公正な価格の形成と流動性の確保に、一層の努力が求められるといえそうだ。

中部商取、システム取引へ

綿糸と繭糸は廃止

中部商品取引所は十月十八日の臨時総会で、コンピューターによるシステム取引導入に伴う定款の一部変更等を承認した。十一月十九日、システム取引に移行する。また、来年三月末で綿糸と繭糸（乾繭）の上場を廃止すると正式に決定した。

中部商取のシステム取引は、現行の板寄仕法を引き継ぐ。当初、板寄せにするのか、ザラバ仕法を採用するかが検討課題になった。だが、システム取引に参加する受託会員四十六社、市場会員四社のほとんどが手慣れた板寄仕法を希望したので、その声にしたがった。基本ソフトと機器等は五年リースで、費用総額は七億四千百二十二万三千円。

ただ、スタート時の取引システムは一系列で、あまり余裕がない。軽油やココアの新商品上場の予定もあり、システム取引の導入を機に、上場商品の一部を整理することにした。綿糸と繭糸の取引を九月新ポ発会の来年三月ぎりでそれぞれ打ち切り、来年三月ぎりが納会するのを待って上場を廃止する。

まずは順調なスタート

どう広げるヘッジ需要